

岩手医科大学歯学会第1回例会抄録

日時：昭和51年2月14日（土）

場所：岩手医科大学歯学部講堂

演題1. クル病によるエナメル質減形成に対して咬合回復を果した1例

○関 重道*, 土田秀三*, 小守林尚之*, 関山三郎*, 似内 晃**

岩手医大歯学部口腔外科学第2講座*

岩手医大歯学部補綴学第1第2講座**

今回、我々は、本学整形外科にてクル病と診断され、歯科的精査をすすめられた1症例を、経験したので報告した。

症例は15才女子で、初診は昭和47年4月28日、3才頃よりクル病と診断され下肢にO脚を認めた。下顎に軽度の突出感があり、歯牙所見では高度のエナメル質減形成を認め、多発性の caries を呈していた。上顎では口蓋がやや深くV字型を示し、咬合状態は、 $\frac{7}{7}$ のみ接触しており他は全く無咬合であった。X線所見では、3が埋伏、1は逆生理伏歯を示していた。歯根は彎曲し、lamina dura は消失、根尖未完成歯などが認められた。顎骨においては、石灰化不全が著明で特に下顎骨では骨梁が淡く、乱れており歯槽突起は發育不良で骨体は全体として細くなっていた。セファログラムの所見では、skeletal pattern においては下顎前突様の pattern を呈し、オトガイ部の前方突出が大であること、A点（上顎歯槽基底部前方限界点）の前方發育が不良であった。Denture pattern では、上顎中切歯歯軸の唇側傾斜、下顎中切歯歯軸の舌側傾斜が著明で、下顎前突の様相を呈した。臨床経過は、6 5 4、7を抜歯、1逆生理伏歯、3埋伏歯を抜歯、その他の歯牙は、できるだけ保存するよう努めた。保存的処置を施した後、咬合状態改善のため、本学補綴科へ依頼し、咬合平面を決定したのち、3 3部にメタルボンド、4 5部にレジン金属冠、6部に全部鑄造冠を装着し、欠損部には局部床義歯を装着して、補綴的処置を終了した。

クル病は、ビタミンD欠乏、日光紫外線欠乏による石灰新陳代謝障害によって起る疾患とされている。歯科的には、エナメル質減形成が、クル病患者に特有にあ

られることから「クル病の歯」という命名もある。本症例においても、臨床的にも、X線的にも同様の結果を示した。以上、クル病患者における歯科の特徴と咬合回復を図り、良好な結果を得たので報告した。

演題2. 導尿用 balloon catheter を用いた上顎骨骨折の1治験例

○森 豊, 松本 断, 水野明夫, 関山三郎
岩手医科大学歯学部口腔外科学第2講座

顎顔面部の骨折は近年著しく増加しているが、その治療は機能的審美的要件から、臨床上問題となる場合が多い。今回、私達は左側頬骨部の陥没を伴う上顎骨骨折に対して、導尿用 balloon catheter を用いて整復固定を行ない、良好な結果を示した1症例を経験したので報告した。

症例：23才、男性。初診：昭和50年9月23日。家族歴、既往歴：特記事項なし。現病歴：昭和50年9月23日午後3時頃、ソフトボールを行なっている際中、他の選手の頭部が左側頬部に激突受傷した。意識喪失はなかったが、鼻出血が中等量あり、近くの整形外科を経て当科に紹介、入院した。現症：全身所見、体格大、栄養良、体温37℃。口腔外所見、左側頬部を中心に境界不明瞭な中等度の腫脹あり。左側眼球結膜に出血斑、下眼瞼は全体に浮腫状腫脹あり。また左側上口唇部に知覚麻痺が認められた。口腔内所見、咬合状態比較的良好であるが、開口度は1横指・触診にて7 8頰側に軽度の骨の陥凹を認め圧痛あり。また1-3唇側歯肉に知覚麻痺を認めた。X線所見：P-A, lateral, Water's view, 断層撮影を総合すると、骨折線は眼窩下縁より上顎洞の前側壁、頬骨眼窩側壁部ならびに頰骨弓部に認められ、結果的に頬骨が内下方に変位した状態であった。処置および経過：消炎療法のもの、受傷後14日目に全麻下にて整復術を施行した。3-7頰側歯肉に切開を加え上顎洞側壁部まで剝離、洞内小骨片数ヶを除去し、骨膜起子にて上外方への整復をはか

ったところ、開口障害は消失し、顔貌は対称性となった。洞粘膜の断裂があったため粘膜を除去、鼻腔側に対孔を形成し、Foley 30号の balloon catheter を挿入、空気を30ml注入し手術を終了した。術後21日目に catheter を抜去したが、顎骨の変位はなくまた術前にあった知覚麻痺、開口障害は認められなかった。現在4ヶ月を経過しているが、顔貌所見、X線所見とも良好である。

演題3. 慢性下顎骨髄炎に関する臨床病理学的検討

○真山 孝, 遠藤隼人, 工藤啓吾, 藤岡幸雄
岩手医科大学歯学部口腔外科学第1講座
阿部節子, 鈴木鍾美
岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

近年、化学療法が進歩し、炎症性疾患の治療成績は著しく向上している。しかしながら、その診断や治療に際しては、非常な困難を伴う症例をしばしば経験する。最近、私どもは開口障害、腫脹、硬結などを主訴として来院した慢性下顎骨髄炎の5症例について、今後の治療指針を得る目的で臨臨床的、病理学的に検討を加えたので報告する。

5症例はいずれも20~30才台で、来院までの期間は約1年におよぶ症例が3例であった。来院前に下顎大臼歯の抜歯をうけた症例は4例で、非抜歯例は1例であった。いずれも種々の抗生物質の投与をうけてから当科を受診している。臨床的には最大開口度が4~12mmが2例、20~25mmが2例で、1例は36mmであった。また5症例とも顎角部を中心とした腫脹、硬結が著明であったが、歯牙ならびに歯肉粘膜の症状は軽度か、または殆んど認められなかった。X線的には種々の程度に下顎臼歯部から下顎枝部にかけて、スリガラス様骨不透過像あるいは一部に骨吸収像がみられ、下顎骨下縁における骨膜の肥厚が認められた。病理組織的には、骨髄の炎性肉芽化、線維化および骨の複雑な改修像(Osteoidの形成の程度、骨梁の石灰化の程度および大きさ、形、配列密度の程度など)などが認められ、また、下顎骨外周縁においても骨髄と同様な所見をみ、放射状の骨新生像の添加がみられた。細菌検査ではいずれも菌の検出はみられなかった。治療は抗生物質投与によっていずれもある程度の緩解がみられたが、完全消失には至らなかった。そこで4例は該部歯

牙の抜歯、搔爬を行ったところ、1例は経過良好であるが、3例は再発を繰り返している。また下顎骨離断を行った1例は経過良好である。

以上、化学療法に加え、原因歯の抜歯や搔爬などで良好な経過を辿る症例もあるが、症状の遷延例や再三にわたる再発例では、積極的な顎切術が必要と思われる。

演題4. 松尾村における歯科保健活動の評価 1年後の成績について

○原田 潮, 飯島洋一, 松田和弘, 高江洲義矩
岩手医科大学歯学部口腔衛生学講座

わが国における齲蝕の蔓延は歯科医療における需給関係を著しく不均衡にしている。疫学的解析結果によっても、わが国の乳歯および永久歯齲蝕罹患が急激に上昇していることが確認されている。このことは、学校保健において、歯科保健指導の効果が減弱されている現状に至っている。

岩手県松尾村において、昭和49年から齲蝕予防を目的とした地域歯科保健活動を岩手保健所、村の保健担当者、県衛生学院、岩医大口腔衛生のメンバー構成で行っている。今回、この活動状況についての評価を試みた。乳歯齲蝕罹患についてみると、def 者率、def 歯率、def Index について1才~4才までの各年齢群において齲蝕罹患の減少傾向がこの保健活動1年後においてみられた。1才児については、def 者率において、前年度45.1%、1年後24.4%、def Index では、前年度1.57、1年後1.00と顕著な差異がみられた。3才児では、def 歯率(前年度38.2%、1年後34.7%)に有意の差が認められた($P < 0.05$)。予防活動実施1年後に齲蝕罹患に減少の傾向がみられたことは(罹患像のパターン分析結果)、1才児からのフッ化物塗布と母親に対する食事指導および歯口清掃指導が乳幼児の齲蝕発生の予防に効果的であることが今回の資料から推察される。その他、乳歯齲蝕の進行が早いという特徴は、一方において齲蝕の予防効果が永久歯よりも早期に現われることが考えられる。なお、本活動は継続中であるので、詳細な評価が可能となろう。

演題5. 歯科矯正学教育を考える

一卒前教育と卒後教育(大学院)について一